



「まず非常に色彩が豊か。関西は、ラテン系というか、とても感覚的ですよ」
 — 横尾さん

ゲスト

横尾忠則

さん(美術家)

Interview _ Tadanori Yokoo

「梅原龍三郎の作品には、関西の感性を感じませんか？」
 — 高橋館長

館長対談
vol.9



アーティスト同士の邂逅が生み出す究極の対話

世界各国の美術館にその作品が収蔵されている日本を代表する美術家、横尾忠則さん。今回の館長対談は、横尾さんの作品が生まれるアトリエで行われました。ダリやウォーホルをはじめとした芸術家と直接会って対話をした経験をもつ横尾さんだからこそわかる、ルノワールと梅原龍三郎の深い絆のお話です。

高橋 今日横尾さんのアトリエにお邪魔しての対談ということで、とても楽しみにしております。今回は、三菱二号館美術館で10月19日から開催される「拝啓 ルノワール先生——梅原龍三郎に息づく師の教え」展をテーマに、横尾さんにいろいろお話しさせていただきたいと思っております。

横尾 梅原さんとルノワールの展覧会ですか。それは興味深いですね。展覧会には、何点くらい出品されるんですか？

高橋 全体で約80点です。その内の約4分の1がルノワール、4分の2が梅原、残りの4分の1がルオーやピカソなど、梅原と親交のあった画家や、梅原が蒐集した作品です。

横尾 梅原さんのコレクションも見られるんですね。コレクションは蒐集した人物の背景も見てくるから面白いですよ。

高橋 梅原は20歳のときに渡仏して、ルノワールに会って以来、彼を師と仰いだといわれていますが、わたしはふたりの作品の傾向は結構違うなど感じているんです。

横尾 たしか梅原さんがルノワールのアトリエを訪れたとき、「自分の絵を描きなさい」と言われたんですよ。

高橋 ええ、その通りです。



横尾忠則(よこおただのり) 美術家

1936年兵庫県西脇市に生まれる。ニューヨーク近代美術館、カルティエ財団現代美術館など内外多数の美術館で個展を開催。今後もスイスの美術館「ゾンド・アヌール(9/16-)」、ロシア国立東洋美術館(10/6-)など世界各国の美術館で個展を開催予定。2012年、神戸に横尾忠則現代美術館開館。2013年、香川県豊島に豊島横尾館開館。第27回高松宮殿下記念世界文化賞受賞。